

翻 訳

戴 裔 煊 著

『宋代鈔塩制度研究』(3)

安 蕪 幹 夫

第二編 鈔塩制度之横的研究

第一章 交引

- 一 交引积義
- 二 交引与宋代其他信用貨幣性質之差別
- 三 交引之淵源 以上「広島経済大学経済研究論集」第16卷 第2号
- 四 交引之種類
 - (1)塩交引 (2)茶交引 (3)見銭交引 (4)香葉犀象等交引 (5)鑿引
 - (6)其他

第二章 塩鈔

- 一 塩鈔积義
- 二 塩鈔之内容板式与鈔紙
 - 甲 塩鈔無遺存之原因及其内容之推測
 - (1)塩鈔支塩以後即塗抹繳銷 (2)繳銷之塩鈔由太府寺点对焚毀
 - 以上「同上」第16卷第3号
 - 乙 塩鈔之板式及鈔紙
- 三 塩鈔價格
 - 甲 解塩鈔価
 - 乙 東南塩鈔価
 - (1)鈔法推行前之東南塩鈔及鈔価 (2)鈔法推行後之東南塩鈔価
 - 以上本号
 - 丙 福建塩鈔価
 - 丁 広南塩鈔価
- 四 塩鈔之措置印刷交易機関

甲 太府寺

(1)太府寺之職掌与元豐改制前後之塩務行政 (2)太府寺之組織

乙 交引庫

丙 權貨務

(1)權貨務建置沿革 (2)權貨務之官吏 (3)權貨務收入增虧之比較与賞罰

丁 其他外路出壳塩鈔機關

(1)北宋陝西之折博務与壳鈔場 (2)南宋兩廣之壳鈔庫

戊 交引鋪

(1)交引鋪之所在地 (2)交引鋪之任務

第三章 鈔塩制度下之提舉茶塩司

一 提舉茶塩司之職掌及其沿革

二 提舉茶塩司之人事機構

三 提舉茶塩与塩課增虧之考較制度

四 提舉茶塩官姓名拾零

(1)北宋提舉塩事官表 (2)南宋提舉塩事官表

第三編 鈔塩制度之縱的研究

第一章 交引塩制

一 入中折中与交引塩制積義

二 入中之嚆矢与利用茶塩折博之倡議者

三 解塩之通商与折博

(1)宋初解塩東西南三区之通商制度 (2)陝西州軍入中之優潤則例及紐筭顆塩方法

四 東南塩之通商与折博

五 川塩河東塩閩広塩之折博

(1)川塩 (2)河東塩 (3)閩広塩

六 折中倉与塩之折博

(1)折中倉建置之倡議者及其建置年代 (2)折中倉之規制及入中支塩則例

第二章 引鈔塩制產生存在与時代需要

一 入中制度之来由

二 折中制度之来由

三 引鈔塩制產生之歴史因素

第三章 范祥鈔塩制

一 范祥鈔塩制產生之条件

二 范祥及其鈔塩制

- (1)范祥之略歷 (2)范祥鈔鹽制
- 三 范祥鈔鹽制推行之阻力及其推行之效果
- 四 范祥鈔鹽制成功條件之分析
- 第四章 鈔鹽制之變遷與頹壞
 - 一 薛向對於解鹽之措置
 - (1)罷州縣征收鹽課 (2)減沿邊八州軍器鹽價 (3)改善駐夫待遇減少駐夫數額 (4)作小鈔壳解鹽 (5)即永興軍置壳鹽場
 - 二 熙豐間鈔法之頹壞
 - (1)熙寧末鈔法頹壞之概況 (2)熙寧十年之改革 (3)改鈔以後之狀況
 - 三 哲宗時鈔法之概況
 - (1)確定解鹽鈔歲額為二百萬緡 (2)陝西沿邊八州軍器鹽復范祥旧制
 - 四 鈔鹽制變遷與頹壞之剖析
- 第五章 鈔鹽制及其功能之轉變
 - 一 鈔鹽制功能轉變之外觀
 - 二 鈔鹽制轉變之因素
 - 三 崇寧初措置鈔法之講義司
 - 四 崇寧大觀之鈔鹽制
 - (1)蔡京改鈔法之嚆矢 (2)買鈔所之設置與換鈔法 (3)崇寧大觀間之貼納對循環法 (4)蔡京崇寧間對於鈔法之其他措置 (5)大觀末之改革
 - 五 政和宣和間之鈔鹽制
 - 六 鈔鹽制屢變之效果與影響
- 第六章 南宋鈔鹽制度之推廣
 - 一 南宋國用與鈔鹽制關係之概觀
 - (1)南宋國用匱乏之一斑 (2)鈔鹽制對於南宋財政上所負之任務
 - 二 淮浙鈔鹽制之紛更
 - (1)淮浙鈔法之屢更 (2)倉場支鹽制度之罷復 (3)淮浙鹽之加饒
 - 三 閩鹽鈔制之推行及其罷止
 - (1)福建鈔鹽制與鈔鹽錢 (2)鈔法再行於福建及其罷止原因之剖析
 - 四 兩廣客鈔官般之起仆
 - (1)兩廣鹽官壳通商之經過 (2)兩廣客鈔官般屢罷屢復理由之探討
 - 五 趙開蜀鹽引制
 - (1)趙開及其引鹽法 (2)趙開引法之功效及其流弊
- 第七章 結論
 - 一 鈔鹽制與官般官壳制對於宋代財政上所負任務之比較觀
 - 二 鈔鹽制之發展與時代需要之關係
 - 三 從鈔鹽制研究所得之制度觀

なお翻訳するにあたっては、今回も沙鄭軍君（本学大学院前期課程二年在学中、蘇州大学歴史系助理研究員）が素訳を試み、訳者が推敲し論考を構成した後に討論を行う方法をとった。この場を借りて御協力戴いた沙君に感謝申し上げたい。

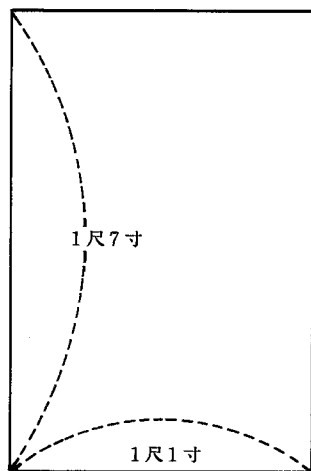
乙 塩鈔の形式及び鈔紙

塩鈔と交引は、ともに彫板で印製されて出来ている。ただ塩鈔の大きさは如何に、すこぶる探求の価値があるが、ただこの方面の材料については甚しく欠乏している。塩鈔の大小は、鈔板の大小によって定まっている。その様式の大小は、各時代においてでも一致するのかどうか、かなり答えにくい問題である。群書を遍考しても、これに対してはともに解釈したところがない。建炎2年4月23日中書侍郎兼專一提領措置戸部財用張慤の言によれば、「其鈔引別立字号式様分明開説」⁽³⁾という語があるので、鈔式は各時代によって一致していないことは、想像によって知ることが出来る。

塩鈔の形式について、現在得て考証出来るものは、ただ宋徽宗の崇寧元年8月5日に、戸部が太府寺に言った当時の塩鈔の形式がある。この外には、別に記載はないが、ここに、その大きさを図をもって示せば、右のようになる。

この形式が、まるまる宋の時代の塩鈔の大きさを代表しているとは言えないが、最低限度でも北宋徽宗の初めと哲宗末の解塩鈔の形式を代表しているであろう。

その他、東北・東南閩広塩について、その鈔の形式は如何に、みな考証することは



宋代塩鈔の板式

（依『宋会要』食貨24，崇寧元年8月5日条）

(3) 見『宋会要』食貨32茶塩雜録建炎2年4月23日条。

出来ない。確実な資料はなく、また妄行推断はしたくない。

その次に印鈔用の紙について、ここでも討論するつもりである。解塩鈔を印製するのに使用した紙は、商・虢州、河中府などから出たものである。大体最初はその土地の材料を使用する。それ以後には、慣例を踏襲して変えることはなかった。元豊5年4月22日の三司の言によれば、

「朝旨給塩鈔二百万貫与涇原路陝西轉運司，勘会印鈔紙見闕四十八万張。若伺候商虢等州科買起發，顯見住滯，欲用雜物庫襄州夾表紙印造。

上批…紙色不依自来所用非便，宜止令依久例所用上色堪好紙印造。」⁽⁴⁾

とある。

この文を見て分かることは、解塩鈔を印造するのにこれまで商・虢などの州の紙を使用した。この州はともに陝西路の地域にあって、解池との距離は遠くない。宋楽史の『太平寰宇記』、王存の『元豊九域志』、『宋史』地理志を考証すると、商・虢などの州はみな産紙で有名なところではない。その他の土貢は薬材しかなく、麝香・枳殻・枳実・地骨皮などのような類のものである。⁽⁵⁾このことは則ち、紙は産出するといっても良品ではなく、その土地で材料を調達したので、その紙を使用したにすぎないのである。

この種の鈔紙は、崇寧の初めに東南路分で紙を産出する州軍より定造され、通商貨売することは禁止されている。ただ官司に供給して、塩鈔を印造する場合のみに使用される。もし勝手に製造して売買する者があれば、民の密告を許して捕え、一人当たり賞銭は30銭である。紙の様式は一致しており、規定は形式の大小による。以前に外路の塩鈔を印造した時には、単に普通の紙を用いて印刷した。当時渭州で偽造された塩鈔の発覚があったので、故に紙色及びその売買のことに關しては特別に制限を加え、流弊の発生を避けた。⁽⁶⁾

(4) 見『宋会要』食貨24塩法元豊5年4月22日条、『統資治通鑑長編』325与『会要』同。

(5) 按陝州・虢州・商州皆在陝西路之東南，相距不遠，宋楽史『太平寰宇記』卷6，陝州土産為「柏子仁（貢）・瓜蒌根（貢）・絶絹・麝香・蕤仁・石膽」等。又虢州土産為「方紋綾（貢）・花紗・絹・梨・棗・硯瓦・麝香・蜜・黃丹」等。而『元豊九域志』卷3記虢州土貢止有「麝三兩，地骨皮一十斤，硯二十枚」，商州土貢「麝三兩，枳殻枳実各一十斤」，『宋史』87地理志同，俱不言産紙。

東南において紙を産出した州軍はどこなのか、ということに至っては、未だ説明がない。所謂東南州軍は、両浙・淮南・江南等路の州軍を指すという。いま楽史の『太平寰宇記』、王存の『元豊九域志』、『宋史』地理志などの書物によって考証して得た三路の土貢の中で、紙のある州軍は次のようになっている。

路 別	州 軍	備 考
両 浙 路	臨安府 (杭州)	見寰宇記93, 九域志巻5, 宋史88地理志
	紹興府 (越州)	見九域志巻5, 宋史88地理志
	婺州	見同上
	瑞安府 (温州)	見同上
	衢州	見同上
	睦州	見寰宇記95
淮 南 路	真州	見九域志巻5, 宋史88地理志
江 南 路	宣州	見寰宇記103
	徽州 (歙州)	見同上巻104, 九域志巻6, 宋史88地理志
	池州	見同上各書
	袁州	見寰宇記109
	吉州	見同上
	撫州	見同上110
	南康軍	見同上111

- (6) 『宋会要』食貨24塩法崇寧元年8月5日戸部言・「太府寺申、自来解塩鈔用商・虢州・河中府等處一鈔紙印造、於鈔法係閑防揩擦、交引庫近乞於東南出紙州軍、造一等抄紙、預行買發三年、準備泛給鈔紙、計六百八十四万張。依見印鈔板長一尺七寸、徑一尺一寸、今乞下商・虢州・河中府依上項長闊造一鈔連毛頭紙、依数起發前來、赴交(原作「文」誤)引庫交納品印造交鈔、仍乞指揮逐州府據上項一樣紙不許通商、貨売・除供官抄造印鈔紙外、輒敢依上件尺様抄造買売者各杖一百、許人告捉、每名支賞錢三十貫、以閑防革絶姦弊、看詳於東南路分応出紙州軍令發運司管認上件紙数、責限起發、徑赴太府寺交納、所有不許通商一節、並依解塩司所申事理」、從之。時渭州申勘到偽鈔人、緣戸部自来支降外路塩鈔、並用常紙印給、致有偽造、都省提送戸部、本部下太府寺相度而有此請」。

所謂東南州軍は、大体上例の各州軍を指す。ただ、一体どの州の紙を使用したのか、しかし資料を得ることが出来ないので、詳しい考証は無理である。南渡以後会子を造った紙は、潛説友の『咸淳臨安志』巻9によれば、多くは徽州及び成都において製造された、と言っている。乾道4年(1168)3月に至って、提領官權兵部侍郎陳彌作の請に従って「造会紙局」を九曲池に設置し、のちに赤山の湖濱に移した。同時に又「安溪局」もあって造紙を専らにした。度宗咸淳2年(1266)9月に造会紙局に併入され、工徒の人数は咸淳年間でもやはり1,200人⁽⁷⁾がいる。その規模の大きさは、これによって予想することが出来る。

今、南宋の塩鈔を印造した紙が、最初に徽州或いは成都で取材され、のちに会紙とともに造会紙局及び安溪局により製造されたことを仮定すれば、かなり理にかなっているかも知れない。ただ確実な証拠をまだ得ていないので、やはり武断したくはない。

塩鈔の印製、出売等の機関、太府寺の交引庫、權貨務などについては、詳しい叙述を別に行うつもりでここでは贅言してない。

三 塩鈔価格

鈔法は、宋の仁宗慶暦の末に范祥が解塩を制置した時に創始された。塩鈔の名はこれから始まり、こののちには宋の時代が終わるまで続き、やはりこの称が用いられていた。ただ鈔を売るのに何をもって単位となすか、如何に計算をするのか、価格はどのくらいか、時により地によって同じではない。商人は塩を買うのに鈔をもってし、解塩から始まったといっても、宋の神宗の世に淮・浙・福建の塩もまたかつてこれを使用していた。哲宗の時に至って解池が水壊し、解塩は産量が欠乏して国用に応副するのに不

(7) 南宋潛説友『咸淳臨安志』巻9「造会紙局在赤山之湖濱，先是，造紙於徽州，既又於成都。乾道四年三月，以蜀遠紙弗給，詔即臨安府置局，從提領官權兵部侍郎陳彌作之請也。始局在九曲池，後徙今處。又有安溪局，咸淳二年九月併焉，亦領以都司，工徒無定額，今在者一千二百人，咸淳五年之二月，有旨住役」。塩鈔之紙，或即取給於此。

足が生じた。従ってここにおいて鈔法は、東北・東南で推行された。徽宗が即位して蔡京が政権を把握し、ちょうどそのチャンスに際して、鈔法は正式に東南で施行された。金兵の南下に至って、徽宗・欽宗が捕虜となって宋室は南渡し、国土の半が異民族によって占領されたので、河東・河北・京東等の塩を相継いで喪失し、このために国用が不足した。ここにおいて福建・両広で相継いで塩鈔法を推行した。ただ、興革は常ならずして罷復も定まっていない。いま鈔価を討論するのに、次のような順番によって述べる。

甲 解塩鈔価

范祥のときの售鈔の価格の計算について、史籍には未だ明言したものはない。沈括の『夢溪筆談』11によって、

「兵部員外郎范祥始為鈔法令商人就辺郡入錢四貫八百，售一鈔，至解池請塩二百斤，任其私売。」

とあり、

馬端臨の『文献通考』巻9錢幣考2の注には、

「承平時解塩場四貫八百售一鈔，請塩二百斤。」

とある。

馬端臨が記載したものは、沈括のものと同じである。ただ馬氏は承平の時と言うにとどめているが、范祥が鈔法を創始した時を指すのかどうかは、明らかにしていない。馬氏の文は或いは『夢溪筆談』を根拠としている可能性もある。

ただ北宋の龔鼎臣の『東原錄』の言に、

「度支（「支」下应有「員」字）外郎范祥作制置解塩事。旧日沿辺令客人入斛斗或造櫓樓瓦木之属，凡直六貫，即支解塩一席。祥遂制置边上客人入一色見錢，教（疑「教」為（交）字聲近之誤）錢六貫，依旧支与一席，客人得一席，⁽⁸⁾売得十貫。」

とある。

(8) 本文所引龔鼎臣『東原錄』為『函海』本不分卷，文中訛誤處頗多。

龔鼎臣の記載をみると、范祥が鈔法を創始したときに売った塩鈔は、毎席六貫文というが、沈括の言ったものと一致しない。『宋史』331沈括伝と347の龔鼎臣伝を考証してみると、沈括は元祐8年(1092)に死に、龔鼎臣は元祐元年(1086)に死んでいて、二人は時を同じくしているので、言ったことは相互に差異すべきではない。

また北宋王鞏の『隨手雜錄』(全一卷)によれば、

「范祥鈔法，陝西貯錢五百萬貫，不許輒支用，大約每鈔錢極賤至五貫，則官給錢五貫五十文買之，極貴，則官減五十文貨之，低昂之權，常在官矣。」

とある。

王鞏が『隨手雜錄』に記録したものは、また前の二人の記載したものと合致していない。王鞏について考えてみると、彼は王旦の孫であり、また沈括、龔鼎臣と時を同じくするかやや後である。彼が言った毎鈔の鈔価はきわめて安く、則ち5貫と為す。きわめて高いということは未だ明言されていないが、その相違はそんなには差がない。

上例の数種の資料を総観して、帰納して言えば、范祥の時の解塩鈔の価格について三説を得ることが出来た。

- (a) 沈括と馬端臨は毎鈔の売価が4貫800文であり、支塩200斤であると言った。
- (b) 龔鼎臣は6貫の錢を納入してから、支塩1席(毎席の斤数は言っていない)と言った。
- (c) 王鞏は鈔の価格には高低があり、官の売買価格は5貫50文と5貫の間にある(毎席の斤数は言っていない)と言った。

解塩について考察すると、解塩は席をもって計り、席には大小がある。『宋史』181食貨志塩上によれば、毎席の斤重については、計算は二説ある。一説は毎席の重さは116斤半であり、一説は116斤である。王応麟の『玉海』181に挙げた解塩の産額と『通考』及び『宋史』食貨志の産額とを考証して、斤数と席数との比較をもってすれば、毎席116斤半と為すべきことが分かった。所謂116斤というのは、則ち小数を除いて言っているの

ある。ただし、これは小席である。『長編』165慶暦8年10月丁亥の条及び『宋史』181食貨志によれば、「総為塩三十七万五千大席」という語がある。大席の斤重はどのくらいか、『宋会要』食貨36權易景德元年10月の勅定陝西州軍入中錢文則例によれば、一席は大体重さ220斤であり、これはまさに大席を指して言っている。すなわち入中してから算請するところの塩貨は、まさに大席なのである。大席の斤重は220斤で一定しているのかどうか、抑えてのちには200斤にしたのかも知れない。判断する材料が不充分なので、妄行武断することは出来ない。しかし毎鈔の請塩は大席をもって単位と為したことには、疑問が無いようである。まずさしあたっては、沈括と馬端臨が挙げた200斤の是非を論ずるために、大数によって言った。その数は大席によって言ったことには、疑議が無いようである。

これを明らかにして進んで鈔価の問題を討論するのに、上述の三説の差異を解決しなければならない。李燾の『統資治通鑑長編』165慶暦8年10月丁亥の条の范祥鈔法を言ったところによれば、

「罷並辺九州軍入中芻粟，第令入実銭，以塩償之。視入銭州軍遠近，及所指東南塩，第優其估。」⁽⁹⁾

とある。

これは則ち銭を出して鈔を買うのに、入銭地方の^{みちのり}道程の遠近をもって差等をつくる。同じ一席の塩を得るのに、また同じ一席の塩の鈔を得るのに、その入銭の地方が、遠い者ならば少しの銭を出してこれを得ることが出来る。近い者ならば多くの銭を出せばまたこれを得ることが出来る。一席の塩の斤数は定められているが、一席の塩に出す銭は区域の遠近を見て定め、一律に同等価銭を出すのではない。ただ一定の地方では、その価格は一律である。三説はみな同時に進めても、互いに矛盾衝突はしない。以上述べた三説についてこれを見れば、われわれは合理的な仮定を得ることが出来る。最も遠い沿辺州軍で入銭買鈔すれば、毎鈔大体4貫800と為し、近い

(9) 『長編』165慶暦8年10月丁亥条之文、与『宋史』181食貨志塩上之文大致相同、大抵同根據『国史食貨志』者。

ものは大体6貫と為した。王鞏の『隨手雜錄』で言ったのは、范祥の鈔価が安定している時の措置に対しての言である。そうして当時は、商人が入錢買鈔を為すには、必ずしも全部請塩しなくてもよい。その請塩塩売しないもの、すなわちこの種の鈔は、やはり權錢の作用があり、塩の価格が落ちることを恐れ、やはり政府がこれを収買しなければならない。5貫は一般的には最低の価格であり、増損50文、50文をもってこれを調整する。

当時の鈔は、環境の需要と出鈔数量の多寡に従って価格の高低がある。范祥が宋の仁宗の皇祐5年(1053)4月庚午朔に、勝手に古渭城を建造したことを考証すれば、陝西の転運使度支員外郎から屯田員外郎に降格された。⁽¹⁰⁾ 嘉祐3年(1058)7月に制置解塩を回復する時に「置官京師、蓄錢二十万緡、以待商人至者、券若塩估賤、則官為售之、券紙六千、塩席十千。」⁽¹¹⁾とあって、当時の塩鈔の収買価格は、毎券6貫であることが分かる。

解塩は、宋初より官売通商と制度が違うので、その銷行の区域は東西南の三区に分けられている。南塩は即ち上述の京西の唐・鄧など十三州軍である(見前注3)。東塩は宋初には禁權の地であり、即ち三京、京東の済・衮・曹・濮・単・鄆州・広済軍、京西の滑・鄭・陳・潁・汝・許・孟州、陝西の河中府・解・陝・虢州・慶成軍、河東の晋・絳・慈・隰州、淮南の宿亳州、河北の懷州及び澶州諸県の河南にあるものである。西塩は則ち陝西の京兆・鳳翔府・同・華・耀・乾(商)涇・原・邠・寧・儀・渭・邠・坊・丹・延・環・慶・秦・隴・鳳・階・成州・保安・鎮戎軍及び澶州諸県の河北にあるものである。⁽¹²⁾ 従って、「解塩鈔分東西、而西塩止得売於指定地分。並辺州軍市芻糧、給鈔過多、故鈔及塩皆賤而難售、商旅不行、官価自分而為二」とあること、⁽¹³⁾『宋会要』食貨23に載した『統国朝会要』の文

(10) 『長編』174皇祐5年夏4月庚午朔条、按『宋史』181食貨志塩上亦有至和元年時祥已坐他罪貶之語。『宋史』303范祥伝及張方平『樂全集』36傳公(字命之)『神道碑銘』言范祥築古渭州之事甚詳、与本文無関、不録。

(11) 『長編』187嘉祐3年6月壬辰条、『宋史』181食貨志塩上同。

(12) 見『宋史』181食貨志塩上。

(13) 見『宋会要』食貨24元豐2年2月17日条、『宋史』18食貨志據『会要』之文亦同。

によって、神宗の熙寧・元豊年間の東西鈔価は、次の表のように作成出来る。

路 別	州	軍	東 塩 鈔 価 (以文為單位)	西 塩 鈔 価 (以文為單位)
永興軍等路	延州		6, 158	5, 600
	慶州			
	環州		6, 058	5, 500
		保安軍		
秦 鳳 等 路	原州		6, 308	5, 600
	渭州		6, 258	5, 060
	秦州			5, 500
		通遠軍		
		德順軍	6, 208	5, 500
		鎮戒軍	6, 150	5, 500
	熙州		6, 000	5, 200
	河州		5, 700	4, 900
	岷州		5, 900	4, 100
	洮州		5, 060	4, 800

上表を見ると、東南塩鈔価格は、地域によって異なることが分かった。一般的に観察すれば、東塩鈔の価格は西塩鈔に比べて高く、しかも東塩鈔の最高のもは原州であり、毎鈔は6貫300文以上である。最低のもは5貫文有奇である。西塩鈔の最高のもは5貫600文であり、最低のもは4貫100文である。その相差する原因は、一つは解池との距離の遠近であり、他の一つは売り捌く地域の制限である。鈔価は既に東西に分けた。神宗の熙寧年間に、再び陝西で夏人の乱れがあったので、糧草を計置してこれを以って兵士の食糧とした。そのために熙河の出鈔は予定額より多すぎ、鈔価は暴落して糧草の価格は上昇した。熙寧10年（1077）2月に三司と制置解塩使皮公弼は詳議して、旧鈔を収買する時に貼納の法を行うこと

(14) 詳見『宋史』16神宗紀。

を定立した。当時条具した事項には、「東南旧法塩鈔一席無過三千五百，西鈔一席無過二千五百，盡買入官⁽¹⁵⁾」という文がある。則ち当時の鈔価の低さは、既に概見出来る。

元豊2年(1079)に東塩の価が高く、西塩の価が低いので鈔法を妨げるという理由を以って、西塩の鈔価と東塩等を増した。以後給鈔は東西を分けなくて、西塩の関渡の約束は全部やめられ⁽¹⁶⁾、これからは鈔価は東西を分けない。しかし鈔価の騰貴と下落は、また出鈔数額の多寡によって定まる。哲宗の時かつて官司に勅を降し、ただ鈔面価により博買するのみで、増価するを許さず、違者は徒二年とした。紹聖元年(1094)に樞陝西制置解塩使仇伯玉の請をもって、もとおおり各処の市価の増減に従うことを許し、以前のようにした⁽¹⁷⁾。大抵神宗・哲宗の世に当っては、解塩の鈔価の騰貴と下落は安定しないで、ある時には民間に鈔が多ければ、その鈔価はすぐに安くなって、少なくなると鈔価は高くなった。もともと陝西では銅鉄銭が行使され、旧制では大鉄銭一は小銅銭二に当たった。当時は陝西の鑄銭監で専ら鉄銭を鑄造していたために、銅銭を鑄造することをやめると、銅銭が高くて鉄銭が安くなった。元祐年間には鉄銭1貫5・6百で銅銭1貫と換えることが出来た。鉄銭は価値が低く、しかも妄りに発行されれば、影響は鈔価に及ぼされた⁽¹⁸⁾。塩鈔は軽便で、飛銭の作用を具有している。だから鈔価は、これによって高くなるわけである。北宋劉安世の『尽言集』巻8論陝西塩鈔鉄銭の弊によれば、

「臣伏見陝西塩鈔鉄銭之弊，莫甚於今日，向者塩鈔，沿辺及近裏州軍販売至京，隨處價直增損，不過三五百文，是故塩貨通行，商賈獲利。今則関陝每鈔

(15) 見『宋会要』食貨24神宗熙寧10年2月25日条，亦見『宋史』181食貨志。

(16) 『宋会要』食貨24元豊2年2月17日条「三司及制置解塩司言，東塩価重，西塩価輕，請放西塩得自便而增其価与東塩等，以平鈔法，歲可增十二万緡，後給鈔更不分東西，関渡約束悉廢省從之」。此事亦載『宋史』181食貨志。

(17) 見『宋会要』食貨24紹聖元年9月27日条。

(18) 見北宋劉安世『盡言集』8論陝西塩鈔鉄銭之弊。

(19) 紹聖元年9月27日陝西制置解塩使仇伯玉言「百貨与塩鈔輕重，大概相似，然塩鈔特貴者蓋鉄銭輕濫」云云，見『宋会要』食貨24之30。

一席，価銭僅及十千，纔至西京，所売不及六貫。或就解池請塩一席，脚乗之費，通約一十二千，搬至西京，止売七貫已上。塩鈔与搬塩所折，皆十之四五，此塩鈔之弊也。」

とある。

『宋史』345劉安世伝によると，安世は司馬光が入相する時に推薦されて秘書省正字と為った。司馬光が亡くなった後，呂公著が安世を推薦して右正言に為した。のちに起居舎人兼左司諫に遷り，諫議大夫に進んだ。これはみな元祐年間のことである。この奏は，正に元祐初年に為されたものである。これによって次のことが分かる。哲宗の元祐年間の塩鈔の価格は非常に高く，毎鈔の価銭は，官より10貫で買い西京に至って売っても6貫に及ばないのである。しかしながら，この種の現象は正常なことではなくて，本当のところは，鉄銭の価値が低く，しかも妄りに発行することに関係があるのである。

又『続資治通鑑長編』512哲宗元符2年（1099）7月癸卯の条によれば，章榘は当時の陝西における銅鉄銭の状況を言い，また塩鈔の価格を論じている。その文には，

「熙寧・元豐間鈔価，東南塩鈔，每席貴不過六貫，賤止五貫。若往京師出売，反有利息。遇辺事如熙・河用兵之時，辺上鈔価至賤，在京師官中却用元価収買以平之，度支錢往辺上，以故不計其費。今塩鈔一席至十貫文，在京師雖用本価収買，所失幾半。」

とある。

章榘が言ったところのものは，劉安世と同じである。これによって宋の哲宗の世に（1086－1100），塩鈔の価格は，鉄銭の影響で一種の奇形的な発展を為していることが分かる。京師に在って収買した価格を見ると，正常の価格はまさに5・6貫の左右にあるべきである。

以上述べた内容を総観すれば，われわれは解塩鈔価に対して得べきところの結論は，解塩鈔は席をもって単位となし，価格は時により地によって異なり，需給に相応じているかどうかによって高低がある。神宗の時に熙・河路において用兵があって出鈔が多くなったので，鈔価は安くなった。

鈔価の騰貴と下落は安定しない。哲宗の時に鉄銭を多く鑄造したので、銭価が安くなった。塩鈔は便銭の作用があり、人々が多く貯蔵すれば、鈔価はすぐに高くなった。鈔価の高すぎと低すぎとは、みなそれには原因が存在する。

『宋会要』食貨24哲宗元符元年(1098)10月1日の条に、「三省言解州塩池、為水衝注」とある。解塩の産量不足は、解塩が国家に対して負った任務を、すでにその効能を失ったことを表わしている。徽宗が即位して蔡京が相となって、鈔法が東南に行われることになると、解塩は重大視するに及ばなくなった。崇寧4年(1105)に至って解池は復興され、大觀4年(1110)には旧法によって鈔を印造した(『宋会要』食貨25之1, 8月2日措置財用所状)。政和元年(1111)に詔して、陝西の鈔は額面600により増減を許さない。やがてまた隨時増損を許し(『宋史』181食貨志), すべては旧制を参照した。

乙 東南塩鈔価

この所謂東南塩が、宋代を通じて淮浙塩と称されたことについて言う。東南塩は、いつ頃から塩鈔が始まったのか、ここにまず検討すべき方が良いようである。南宋李心伝の『建炎以来朝野雜記』甲集14総論国朝塩筭に言ったことによれば、

「東南塩者、通・秦煮塩也、旧為江・湖六路漕計、蔡京為政、始行鈔法、取其錢以贍中都。」

とある。

東南塩の鈔法が行われたのは、蔡京の当国に始まったというこの説は、まことにその通りである。のちに更に詳細な討論があるから、ここでは取り敢えず詳しいことは言わない。宋塩の鈔があることを考証すれば、徽宗年間の蔡京の当国の時に始まったのではない。神宗年間にすでにこれはあった。いま、分別して以下のように叙述する。

(1) 鈔法を推行する前の東南塩鈔及び鈔価

『宋会要』食貨38和市，宋神宗の熙寧8年（1075）9月23日の条に，

「杭州助教孫麟，乞借市易務錢五七万緡買紬絹，此杭州結（『長編』268作「給」）錢，民間預買，可増十余匹。詔給末塩鈔四万緡，錢三万緡為本，仍以將作監主簿梅宰同買。」⁽²⁰⁾

とあり，

また10月2日の条の都提挙市易司の言には，

「袁州和買紬絹，旧以塩準折，今乞依諸路例，每匹給錢千，從本司遣官，據合支塩數，以末塩鈔赴州出売，從之。」⁽²¹⁾

とあり，

また『宋会要』食貨24塩法雜錄元豐7年（1084）5月11日荊湖路相度公事，尚書右司員外郎孫覽の言には，

「沅州已招懷侂九衛等百三十余州峒，自誠州至融州融江口十程，可通広西塩，乞許入錢於誠州買鈔。融江口支塩，増息一分，可省湖北歲餽誠州之費。展沅州準此，詔誠州買広西塩，立蠻人地稅，免租課。」

とある。

以上挙げた三つの条文を見れば，宋の神宗の熙寧・元豐年間に両浙・江西・荊湖などの路で，末塩鈔の給買があることには疑義のないところである。上述の各路は東南塩を売り捌く区である。況んや末塩鈔が，解池の顆塩鈔とは全く関係のないことは，はっきりと言える。則ち，宋の徽宗の崇寧の初めに蔡京が東南塩の官般官売を改め，鈔塩制を為す前にすでに末塩鈔があって，蔡京より始まったのではない。しかしながら当時の鈔価は如何に，上列の各条にも言われていない。『宋会要』食貨23の10に，

「鈔価 江淮・両浙・荊湖・福建交印作三等，一等五十貫文，一等四十貫文，一等三十貫文。」

という記載がある。しかし，この条には月日がない。いま『宋会要』のこの文，及びこの文の後の塩額の下に「已上『統国朝会要』」の語がある。この『統国朝会要』は，即ち乾道4年尚書右僕射陳俊卿が提挙編修した『統

(20) 煊案『長編』268熙寧8年9月癸未条与『宋会要』食貨38和市文同，又『宋会要』食貨24熙寧8年9月25日詔給末塩鈔四万緡為本，仍以將作監主簿梅宰同買」云云，日期有出入。

(21) 『長編』269熙寧8年10月乙亥条与『宋会要』食貨38和市文同。

修国朝会要』であり、また則ち陳振孫の『直齋書錄解題』巻5の統会要であり、また或いは『乾道統四朝会要』と称したものである。その書物は神宗から起きて、靖康の末までのもので、⁽²²⁾ 則ちその記載した鈔価は、南宋の時のものではないことが分かった。またこの文の後に各挙された各路の塩額は、元豊年間のそれを指して言ったものである。これは則ちその前の鈔価であり、またまさに熙寧・元豊年間の江淮・兩浙・荊湖・福建の鈔価を指すべきものである。しかも、蔡京が鈔法を行って以後の鈔価を指しているのではないことも想見出来る。

熙寧・元豊年間に末塩鈔は多く紬絹を和買する場合に用いられ、需要の価格が比較的に大きいことが、50貫、40貫、30貫の三等に分けて印造した所以であるというのは、甚だ可能性はある。従来の紬絹を預買するのは、^{ゆえん} 塩をもって基準として換算したのであるから、塩鈔を用いて代替した所以は、運搬の煩わしさを避けられたからである。紬絹を預買することを考証すれば、かつて解塩鈔をもって基準として換算したことがあった。『宋会要』食貨38和市大觀2年(1108)3月4日の条に、

「上批…和預買紬絹，近受八寶赦內，曾詔有司令前期給価，此聞有以塩鈔一席折見錢六貫，至期輸納絹六匹，方今絹価倍高，而鈔価難售。自今仰監司郡県並支一色見錢，不得以他物準折，違者提刑司按劾以聞。本法外加二等科罪，仍不以赦原，委御史台覺察聞奏。」

とある。

これは則ち解塩鈔で紬絹を和買する例であるが、毎鈔の価銭はわずかに6貫で、末塩鈔の価格と違い、これは極めて明白な事である。しかし当時の東南塩鈔は、のちに商人が正式に算請貨売するものとは違っており、鈔法を推行するのはなお宋の徽宗の崇寧年間以後のことである。

(2) 鈔法が推行された後の東南塩鈔価

[22] 見李攸『宋朝事實』巻9会要所下「乾道四年，詔尚書右僕射陳俊卿兼提舉編修『国朝会要』，……五年令本省再加刪定，以『統修国朝会要』為名」云云，據『江陽譜』此文応非『宋朝事實』原文，為後人所附益，但参考『宋史』34孝宗紀其事並無誤。

[23] 可参考近人湯中著『宋会要研究』巻1宋会要考略頁9至10。

解池が水で衝注されたあと、未だすぐには修復出来ていないので、商人が鈔を得ても塩が無いので支還することが出来ない。元来解塩を売り捌く京西・河東・陝西など数路では、塩源が欠乏して供給が需要に応じていない。その他の生産区の塩を以ってしなければ、補充することは出来ない。陝西路では、土塩、私塩、石塩、井塩の運売を許した。⁽²⁴⁾しかし滄・淮の塩もまた、これによって解塩、通商地域に入った。⁽²⁵⁾顆塩が無くて支給することが出来ない鈔は、東北の賓・滄等州及び東南塩を以って代替している。顆塩を供給出来ない地域は、また東北・東南の塩を以って補充して、商人の運売を許す。以上言ったのは皆海塩であり、即ち所謂末塩である。末塩鈔法は、即ちこれによって起きた。宋徽宗の崇寧の初めに、この種の塩鈔の換易算請は、その価格は如何に、従来の解塩鈔と同じかどうか、このことがここで討論したい問題である。しかしながら多くの書物を考証しても、これに対してみなはっきりとした記載が無い。『宋史』181食貨志塩中の言によれば、崇寧元年に蔡京が東南鈔法を変えた時に、「定民間買鈔之価、以抑豪強、以平辺糴、在河北買者率百緡母得下五千、東南末塩鈔母得下十千、陝西塩鈔母得下五千五百、私減者坐徙徙之罪。」とある。この数語を見ても、やはり要領を得ない。文の中で所謂「率百緡」というのは、その意味は即ち100緡を以って率と為すということである。換言すれば、即ち100緡を以って計算して、河北の鈔は5,000を減少できなく、東南の末塩鈔は10,000を減少できなく、陝西鈔は5,500を減少できない。河北鈔価は5,000以上にあつて、東南鈔価は10,000以上にあつて、陝西鈔価は5,500以上にあつた意味ではなく、これは甚だ明らかなことである。『宋史』181食貨志塩上の言によれば、崇寧の初め「蔡京建言河北・京東末塩、客運至京及京西、袋輸送官錢六千、而塩本不及一千、施行未久、収息及二百万緡」

(24) 『宋会要』食貨24元符元年10月1日三省言「解州塩池、為水衝注、塩数少損、民間闕用、欲河中府解州諸小池塩、同華等州私土塩。階州石塩、通遠軍岷州官井監塩、並聽与解塩於陝西路出売、從之」。又見『宋史』181食貨志。

(25) 見同前書崇寧4年4月24日鄜延路經略安撫使陶節夫奏「又以塩鈔法行、滄・淮塩入解塩通商地分」云云。

云云。とある。これは則ち当時の河北・京東の塩は袋を以って計り、毎袋が6貫で、毎鈔が一袋かどうか、明確に記載したものは無い。当時の東南塩に至っては、まだ袋制は行われていない。如何に計算するのか、『宋会要』食貨25徽宗の宣和4年6月23日榷貨務の奏によれば、「崇寧年曾定塩価買鈔折算、每斤酌中者四十足」(『宋史』182食貨志塩中引此作「崇寧年定塩価、買塩折算、酌以中価、斤為錢四十」)とある。これによって、当時の買鈔は斤を以って計り、毎斤は中価をとって40文と為していることが分かる。又『文献通考』15征榷2の中の陳止齋の語を引用して、崇寧元年2月勅「塩鈔每一百貫、於在京入納九十五貫、於請塩處納充塩本。」とある。その鈔は、一定の価格が無かったようである。

宋徽宗重和元年(1118)に東南末塩は、改めて袋制が行われている⁽²⁶⁾。塩は袋を以って計り、毎袋が300斤である。初めは毎袋の塩価は10貫文で、⁽²⁷⁾宣和4年(1122)6月23日の詔により増して13貫と為した。⁽²⁸⁾

宋室南渡後もやはり袋制を行い、淮・浙塩が「五十斤為石、六石為袋、⁽³⁰⁾輸鈔錢十八千。」とある。南渡以後の袋法は、一致していないらしい。当時の袋は大小があり、鈔にもまた大小がある。普通の300斤のものは大袋と為して大鈔を用い、別に一種の小袋があって小鈔を用いている。⁽³¹⁾『宋会

(26) 據『統資治通鑑長編拾補』38重和元年閏9月丙子条引『統宋編年資治通鑑』,「蔡京以塩法尙有未盡,請改袋制」云云。按宋王應麟『玉海』181淳熙解塩図条,政和8年閏月丙寅復行末塩遂改袋制与『長編拾補』所引『統宋編年資治通鑑』之文年日有差異,一称重和元年一称政和8年,其实兩者俱不誤。據李攸『宋朝事實』卷2紀元,政和8年11月1日改重和元年,是知兩者俱不誤。

(27) 見『宋会要』食貨25之宣和4年6月23日詔及『宋史』182食貨志塩中。

(28) 見同前書宣和4年6月23日榷貨務奏。

按『宋史』182食貨志塩中亦云「時鈔法既屢變,蔡京更欲巧籠商賈之利,乃議措置十六條,裁令買官塩価囊以三百斤,価以十千,其糶者聽增損隨時,旧加饒脚耗並罷,客塩旧止船貯,改依東北塩用囊,官製糶之,書印及私造貼補,並如茶籠節法,仍禁再用」所言袋制頗詳。

(29) 『宋会要』食貨25宣和4年6月23日詔「東南東北塩,毎袋三百斤,納錢一十三貫算請」。

要』食貨25建炎4年（1130）2月4日戸部侍郎葉份の言によれば、

「契勘淮浙産塩州軍見行給売六十斤小鈔引，所請塩不販出本州界，今乞依此將客人筭請福建小鈔塩，量与加饒，添作八十斤，計納錢二貫六百文筭請，仍令通本路州県，任便貨売，即不得出本路界，所貴公私兩便，從之。」

とある。

南渡の初め大小の鈔引があり，この種の小鈔塩は，輸錢2貫600になると塩80斤を得ることが出来，大鈔18,300斤ものとは違っている。大鈔塩と小鈔塩との区別は、『宋会要』食貨の記載によれば，則ち大鈔塩は，江・浙・荆・湖の諸路で自由に興販出来る。小鈔塩は，わずかに当該路の州県でのみでしか通行することが出来ない。⁽³²⁾

大袋の斤重は，300斤と規定されているが，納めるところの鈔錢は，随時に増損があつて一定していない。建炎年間宋室が渡江して，中原は掻き乱され，淮塩の道路は通じず，商人が鈔を持って兩浙へ行き塩を搬請しても，浙塩を応付することは苦しい。建炎4年（1130）に広南・福建兩路の塩を利用して，商販者の支請に応じた。ただ通貨錢3貫を貼納しなければならない。『宋会要』食貨25建炎4年2月19日の条の尚書省の言によれば、

「近緣淮塩道路不通，諸色人自京師帶到鈔引，前來兩浙請塩，致応副不起。内温・台州積庄鈔引数多，有致三二年以後，方当支請塩貨。契勘広南福建兩路塩貨，歲出浩漣（煇案…「漣」義不可通應為「瀾」之誤）已許通商，訪問客人皆願筭請，令（疑「今」之誤）相度応温・台州塩倉，不曾支塩，令出給

煇案…『通考』16征權3云…「一囊之価，裁為十一千又復為十三千」，『宋史』182食貨志塩中亦載此文。大抵同引『国史食貨志』之文。惟『宋会要』未見有作十一千字樣，宣和4年6月23日權貨務奏止有「今塩価値每袋作一十貫文」之語，恐十一千為一十千之誤，因存疑而不举此数。

(30) 見『宋史』182食貨志塩中及『文献通考』16征權3。

(31) 『宋会要』食貨25建炎2年12月24日条「提举淮南東路茶塩司言，就場支撓客鈔塩，係依旧用袋給受，其袋法前後所降朝旨与未置州倉已前降法多有不同，除已遵依今降指揮参照，如与袋法所降指揮不相妨者遵奉施行外，若有相妨即依袋法已降指揮，從之」。

(32) 見同前書建炎4年2月4日朝旨「小袋通行本路，大袋許販入江浙荆湖路任便興販」。

公據揭取鈔引連粘付客人前來行在權貨務換給広南福建路鈔引，每一百貫，与支換広南塩鈔六十貫，福建鈔四十貫，内換福建塩者，令依見今則例，每袋貼納通貨錢三貫文，願全換一路者聽從客便，從之。」

とある。

これは則ち，当時福建鈔に換えれば，別に所謂通貨錢3貫を貼納しなければならない。紹興2年（1132）9月に至って更に詔して，淮・浙塩は，每袋につき商人に一律通貨錢3貫を貼納させた。すでに算請はしたが，未だ出売してない者もこれと同じ取り扱いとする⁽³³⁾。原本の規定は，每袋の鈔錢は18,000文で，この3貫を増して臨時に制度を改易した性質を持っている。紹興4年（1134）正月5日の詔によれば，

「權貨務見売淮・浙塩鈔每袋於鈔面前上添錢三貫文省，通計二十一貫文。」⁽³⁴⁾
とある。

この値は，18貫から加えて21貫になっている。9月に至って，入納の遅細を以って，また減じて18貫になった⁽³⁵⁾。紹興31年に商人の算請は，一袋が正錢通貨錢17貫300文を合わせて入納している⁽³⁶⁾。孝宗の隆興2年（1164）に至って，商人が鎮江で鈔一袋を算請するのに，正錢通貨錢17貫600文を合わせて入納している⁽³⁷⁾。乾道元年（1165）9月に臣僚の請によって，淮・浙塩は，每袋に錢3貫を再び増加する⁽³⁸⁾。2年（1166）7月5日に詔して，塩錢3貫を貼納するのは，みな見錢を入納させる。11月1日に更に詔して，

(33) 見『宋史』182食貨志塩中及『繫年錄』58『皇宋中興兩朝聖政』12紹興2年9月甲申条。

(34) 見『宋会要』食貨26紹興4年正月五日条。

煇案…『繫年錄』72紹興4年正月乙卯条云，「詔淮浙塩鈔每袋增貼納錢三千，通旧為二十一千，並計綱赴行在，諸州所収貼納錢，並計綱赴行在，尋命広塩所增亦如之。広塩添錢在此月戊辰（十八日）」与『宋会要』之詔文字不同。又『宋史』182食貨志27高宗紀，及『通考』16征權考3亦有所載，惟略簡。

(35) 『宋会要』食貨26同前条，『宋史』182食貨志27高宗紀，『繫年錄』80及『皇宋中興兩朝聖政』16紹興4年9月戊申条同。

(36) 見『宋会要』食貨27紹興31年4月22日条權戸部侍郎錢端礼等言客販淮浙袋塩，（中略）本務合納正錢通貨錢共一十七貫三百文」云云。

(37) 同前書隆興2年10月7日權貨務言。

塩鈔を入納する時に銭3貫を増加するやり方を永く成法と為して、以後には増減をしないこととする。⁽³⁹⁾宋の寧宗嘉泰4年(1204)3月1日に詔して、臨安・建康の務場で淮浙塩鈔を発売するときに「除塩倉合納銭依旧外、每袋於務場合納銭数内、各減二貫文」とあり、これを一年間行って、開禧元年(1205)5月に至ってまた旧価に回復させた。⁽⁴⁰⁾嘉定3年(1210)に会子の値が下がったことによって、その影響が塩鈔にも及んだ。従って再び每袋官会20貫を増収して、旧鈔の場合は官会10貫を貼納しなければならないことを規定し、まさに塩を支給することが出来た。⁽⁴¹⁾

以上の論述を総合して見れば、東南塩は袋制を改行したあとより、最初には則ち每袋鈔銭10貫を入納させ、やがて増して13貫になった。南渡の初めは増して18貫と為し、紹興年間に再び増して21貫になった。やがてまた減じて18貫になった。紹興の末と隆興の初めにはその価格は最低でも17貫以上であって、やがてすぐに又3貫を増し、寧宗の時にかつて一時2貫を減じたが、やがてまた旧に回復した。官会を増収するのは、特殊な事情に属している。要するに、宋代の淮・浙塩鈔銭は、每袋最高のもので21貫となし、最低でも17貫余りである。南宋と北宋とを比較すれば、相差が4貫と7貫の間にあるが、南宋には正銭がいくらかも増加していなくて、ただ通貨銭を加えるのみである。通貨銭は、最初は3貫と為し、紹興の末には、記載に見られたものはすでに5貫と為している。⁽⁴²⁾

(38) 同前書乾道元年9月15日条「臣僚言…榷務每年客鋪筭請塩鈔每袋合納銭一十七貫有零、欲每袋添銭三貫文、戸部勘当、欲令行在并鎮江建康榷貨務、自今降指揮到日為始、增添給壳施行(下略)。」

(39) 見同前条附文。

(40) 見『宋会要』食貨28開禧元年5月1日条。

(41) 此據『宋会要』食貨28嘉定3年8月27日条、『宋史』182食貨志塩中及『欽定続文献通考』19亦有所記載。

(42) 『宋会要』食貨27紹興30年2月24日条、権戸部侍郎邵大受言「(上略)今欲乞朝廷特降指揮榷將客人每袋合納通貨銭五貫文内悭留三百文就塩倉送納、專一椿充帶還旧欠本銭」。